

2022年2月20日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エレミヤ書 30 : 10～11

ルカによる福音書 21 : 5～9

「おびえてはならない」

< 「終わり」のこと >

21章は、神殿でイエスさまが語られたことが記されていますが、これから語られていくのは、「エルサレム神殿の終わり」のこと。そして、「この世の終わり、終末」のことです。

エルサレム神殿は、イスラエルの民、ユダヤ人たちが、神さまを礼拝するための場所です。

これはたいそう立派な神殿で、ソロモン王時代の神殿と区別して「第二神殿」と呼ばれていました。バビロン捕囚から帰還した後に建て直された神殿です。イエスさまの時代には、あのクリスマスの物語に登場するヘロデ大王が、大規模な改修工事を行っていました。

神殿は、ユダヤ人たちの信仰と生活の中心であり、民族の誇りであり、国を失った彼らの心の拠り所でした。しかしそのゆえに、この見た目にも立派で、重要な建物の存在そのものに、人々は心の平安、安心感を覚えるようになっていたようです。

ただ、そうして「見えるもの」に心を引かれるがゆえに、神さまへのまことの礼拝が失われていること。神さまの御心を見つめて、神さまに従って歩むことが蔑ろにされていること。そのようなことも起こっていることが、旧約聖書の預言者たち、またイエスさまによって、指摘されてきました。

しかしなお、神殿は人々の間で、大変重要な意味を持つ建物だったのです。

ですから、もしも神殿が崩壊する、失われるというようなことがあれば、それは、拠り所も、平安も、民族の伝統も、誇りも、何もかも失われてしまう。ユダヤ人にとっては、「すべての終わりだ」と思われる、あってはならない、とんでもない出来事です。

さて、今日の5節にはこうありました。「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。『あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。』そこで、彼らはイエスに尋ねた。『先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。』」

神殿の素晴らしさをたたえていた人々に、イエスさまの神殿が崩壊するという予告をなさいました。それ聞いた人々は、さぞかし驚いたに違いありません。そして、それがいつ起こるのか。そのときにはどんな徴があるのかを知りたがったのです。

もし、本当に神殿が崩壊するならば、それは世界の終わりに等しい、とんでもない一大事

です。それならば、自分たちも何か備えをしなければならない。いつ起こるかを知って、念入りに準備をし、何とか対処しなければならない。そう思ったのでしょう。

…見えるものを心の拠り所にしてしていると、それを失った時に、わたしたちは大きな喪失感を味わいます。これがあれば大丈夫。これさえあれば安心だ。そう思っていたものを失うとき、人は、もう何もかもお終いだ、という絶望的な気持ちになるのです。

そうすると、わたしたちは焦ったり、不安に陥ったり、投げやりになったりします。

そして今度は、安心を与えてくれるもの、助けになりそうなもの、慰めてくれるものに、慌ててしがみつきたくなるのです。

イエスさまは、わたしたちが、もう終わりだと思ふような世の出来事や、自分の存在に関わる危機に直面した時の、そのような弱さを、よくご存じです。

それで、イエスさまは今日のところで、わたしたちが、もうお終いだという出来事に遭遇した時に心すべき、二つのことを教えられました。それは「惑わされないように気をつけなさい」ということ。そして、「おびえてはならない」ということです。

<惑わされないように>

さて、まずイエスさまはこう言われました。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。」

この「惑う」という言葉は、「道に迷う」とかの、「迷う」という言葉です。

人々が不安に陥るとき、拠り所を失おうとするとき、「わたしの名」、つまり、メシア、救い主を名乗る者が大勢現れる。そして、「わたしがそれだ」「わたしが救い主だ」と偽りを語って、人々を安心させるようなことを言って、従わせようとする者が大勢出て来る、というのです。

また、「時が近づいた」。もうすぐ終わりが来る。世が終わる。そう言って、人々を駆り立て、焦らせ、動かそうとする。そういう、道を迷わせる者が大勢現れる、といます。

だから、そういった人々、そういった言葉に、惑わされないように。歩むべき道を迷ってしまわないように気を付けなさい。そう言われたのです。

さて実際、エルサレムの第二神殿は、紀元 70 年にローマ軍によって陥落し、破壊されました。ユダヤ人たちがローマ軍に反乱を起こしたユダヤ戦争の結果です。

まさにイエスさまがこれを語られてから数年後に、神殿は実際に崩壊したのです。

その時、現実にも偽預言者が現れ、大勢の人々に、神の命令に従って神殿に上り、救いの徴を受けるように言い広めたといいます。そして、大勢のユダヤ人たちがその言葉に従って神殿に非難したのです。しかし、ローマ軍がそこに火を放ち、6 千人もの人々が命を落とすことになりました。

まさに人々は、偽の言葉に惑わされてしまい、従うべきものが分からなくなり、安心できるもの、対処法を教えてください、目の前の見えるものにしがみつき、従ってしまったのです。

しかし、今日の御言葉は、エルサレム神殿の崩壊と、その時に起こることを、イエスさまが見事に言い当てた、ということを示したいのではありません。

そうではなく、この神殿崩壊のような出来事は、いつの世にも起こってくる。わたしたちがこの目で見つめているもの。それは、どれだけ信頼に値し、安心だと思っているものでも、この世のものであるなら、いつか必ず終わりが来る、ということなのです。わたしたちが、もう何もかも終わりだ、と思うような出来事が、この世では起るのです。

しかし、そのような時にあっても、「惑わされてはならない」。恐れて、不安になって、絶望して、偽りの安心に飛びついたり、偽預言者に従ったりして、道に迷ってはならない。そう言われているのです。

<おびえてはならない>

また、今日のところでは「戦争とか暴動」ということも出て来ます。このひたすら破壊をもたらすものは、イエスさまの時代から、今の時代でも繰り返し起こっています。

当時もまた、ユダヤ人の間では、戦争や暴動は、この世が終わりへと向かうことの「徴」、終わりの時が来たことを告げる出来事である、と捉えられていました。

しかしイエスさまは、「こういうことがまず起こるに決まっている」と言われたのです。

これはもちろん、戦争や暴動を認めておられるわけではありません。しかし、神さまの御心に従うことの出来ない、罪に捕らわれているわたしたちの世で、神さまに背く人々の間で、争いは絶えることなく起こってしまいます。

神さまを信じて生きるということは、この世で戦争を免れることや、苦しい、悲しい出来事を避けられることや、安全に、穏やかに、争いなく暮らせるようになること、ではありません。

この人間の罪の只中にある世界で。苦しみや悲しみがあり、傷ついたり傷つけられたりしてしまう社会で。しかしわたしたちが、神さまに赦しをいただいて、神さまに依り頼んで、神さまの御心に従うことを求めて生きていく。愛することができるように祈って生きていく。それが、神さまを信じて生きる、ということではないでしょうか。

だから、これらのことが、ないものだと思ってはならない。そのような罪の只中に、苦しみの只中に、生きていくということを忘れてはならない。こういうことはまず起こるに決まっている。イエスさまは、わたしたちの罪の現実を見つめて、はっきりとそう仰るのです。

<世の終わりはすぐには来ない>

そして、イエスさまがそれらの時に、「惑わされないように気を付けなさい」、「おびえてはならない」と言われる。その最たる理由は、「世の終わりはすぐにはこないからである」ということなのです。

「こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」

つまり、神殿の崩壊や、戦争や暴動。それらは起こるに決まってる。そして、人々はその出来事に、世の終わり、世界の破局、すべて滅びの時としての終末を思うのです。しかしイエスさまは、それらが、世の終わりを、この世の終末をもたらすのではない、と仰るのです。

つまり、わたしたちの世界を終わらせるのは、まことの終わりが来るのは、わたしたちがこの世で依り頼んでいたものや、心の拠り所を失うことによってではないのです。また、わたしたちの愚かな行いによるのでもありません。崩壊している現実や、あらゆるものの破壊を目の当たりにしたとしても。人のなすことや、この世界で起こる出来事が、世の終わりの「徴」なのではない。この世の終末を来たらせるものではないのです。

わたしたちの目に見えるこの世の現実が、すべてを支配しているわけではありません。確かに、わたしたちはこの世界、この目に見える現実の中を生きています。ですから、浮世離れしたように生きなさいとか、この世のことは気にするなとか、そういうことではありません。世界のことを、見て見ぬふりは出来ません。

しかしまず、わたしたちは、目の前に起こっている現実を目を奪われるのではなくて。この見える世界をお造りになり、わたしたちの命をお造りになり、見えるものも見えないものも、すべてを支配しておられる、神さまを見つめなさい。その神さまのご支配、神さまのご計画、神さまの御業を第一に見つめなさい、とされているのです。

世界をお造りになったのは神さまです。そうであるならば、この世界を終わらせるのもまた、神さまの御手によるのです。それは、神さまの時に、神さまの仕方で、神さまが実現なさることです。

そして、終わりの日、終末とは、この世界が終わり、ただ破局を迎え、すべてが滅びるということではないのです。この世界の終わりは、新しい世界の始まりなのです。

それは、救いの完成の時です。恵みの満ちあふれる時です。終わりの日とは、わたしたちの涙が一粒残らず拭われ、神さまと共に永遠に住む、その恵みの始まりの時なのです。

終わりの日は、十字架で死に、復活し、天に上げられたイエスさまが、再び来られる時に起こります。先取りをするならば、21章27～28節にこのように書かれています。

「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」

終わりの日が来る。それは、すべてに勝利された、栄光に満ち溢れた人の子が、天から来られることによってです。

だから、この終わりの日をわたしたちは、世の出来事に惑わされたり、おびえたりしながら待つのではなくて、「身を起こして」「頭を上げて」待ち望み、来られるイエスさまを喜んでお迎えすべきなのです。

終わりの日は、わたしたちの解放の時です。救いの完成の時です。復活の体が与えられ、永遠の命に生き、イエスさまとこの目で見え、天の食卓に招かれる、大いなる喜びの日なのです。

この日がいつかは、すべてを支配なさる神さまが、お定めになります。だから、いつ終わりの日が来るか。どのような徴があるか。それを、わたしたちが知る必要はないのです。

人々はイエスさまに聞きました。「そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こる時には、どんな徴があるのですか。」それを聞いて、どうしようというのでしょうか。

もし、終わりの日がいつ来るかはっきり分かったとして。それによって、何をするつもりで、何をしないつもりのでしょうか。もし、一週間後だと分かったら、何が出来るのでしょうか。もし、何千年も先だと知ったら、もうそのことは考えなくても良いのでしょうか。

「徴」をどうして知りたがるのでしょうか。徴がなければ、まだ何もしなくて良いのでしょうか。徴を見つけ、終わりが近いと分かったら、必死に祈り始めます。いつか分かったら、それまでには目を覚まします。終わりの日の目途が立てば、その時には自分の身支度を整えて、神さまの前に出る準備をします。それで良いのでしょうか。

むしろ、わたしたちは、その日を心から待ち望みつつ、今この瞬間に、終わりの日が来ても良いように。いつイエスさまが来られても良いように。希望を持って、期待をして、今日も、明日も、いつも、祈りをもって備えていることを求められています。

「いつも目を覚まして祈っていなさい。」それが、わたしたちが神さまの御前で生きていく時に、求められている態度なのです。

神さまは、いつでもわたしたちが神さまに心に向けて、いつでも神さまに期待して、いつでも神さまの恵みを受け取る準備が出来ていることを望んでおられます。

そしてわたしたちは、イエスさまの十字架と復活を通して、神さまの愛を知らされているからこそ。罪の赦しを頂き、復活の約束を頂いているからこそ。あなたたちはわたしのものだと言われ、神の子として受け入れられていると知っているからこそ。終わりの日が希望の日であると信じる事が出来るのです。だからこそ、今、この命を与えられている自分の人生に、そして生かされているこの世界に、きちんと向き合い、まことに支配なさっているのは神さまであることを見つめつつ、「御心がなりますように、御国が来ますように」と、目を覚まして祈っていくことが出来るのです。

<惑わされずに、おびえずに>

愛されていることを知らずに、罪の赦しなしに、死の向こうにある復活の希望なしに、わたしたちがこの現実を見つめて生きていくことは、とてつもなく困難だと思います。

どうしてこんなことが。どうして崩壊が。どうして戦争や暴動が。

…イエスさまの時代から、今の時代にいたっても、わたしたちは、苦しみや悲しみ、悲惨な出来事に打ちのめされ、これらがどうして起こるのかを、神さまに問わずにはおれません。

それは、問うてよいのです。神さまに向き合って、問うて、求めて行くべきなのです。

でもやがて、本当に問われているのは、わたしたちの方であると気付かされるのではないのでしょうか。

神さまの御心を問う時、わたしたちは必ず、イエスさまの十字架へと導かれていきます。この世に来られたイエスさまが、神さまの御心をすべて示しておられるからです。

そして、その御心はといえば、神さまはイエスさまにおいて、ひたすら、わたしたちへの愛を、憐れみを、罪の赦しを、語り続けておられるのです。

そのことを知らされながら。その福音を聞きながら。その御手に生かされながら。わたしは、神さまがすべての支配者であることを、本当に受け入れているだろうか。御子の命をも与えた、神さまのわたしへの愛と救いを、本当に信じているだろうか。神さまが人と共に生きることを望んでおられるその御心を、本当に分かっているだろうか。与えられたこの命において、救われたこの命において、わたしは、本当に神さまを愛し、隣人を愛し、弱き人の善きサマリア人となり、敵を赦そうとしているだろうか。

わたしたちは、このことを問われずにはいられません。そして、わたしたちは神さまが望まれる答えを、はっきり答えることが出来ないのではないのでしょうか。

しかし、だからこそイエスさまは、このわたしたちの世界の中に、歴史の只中に来られて、共に、立って下さったのです。わたしたちの悲惨の中に、罪の現実の中に、痛みと悩みと苦しみの中に、その一番深い底の底に、共に立って下さったのです。

そして、わたしたちをその十字架の上に担って、復活へ、勝利へ、神の国へと、わたしたちを引き上げて下さるのです。

わたしたちは、十字架と復活のイエスさまにあってこそ、この赦しの中にあるこそ。自分と、隣人と、この世とに、しっかりと向き合い、神さまの救いや、恵みや、希望を持つべき終わりの日を、しっかりと見つめていくことが出来るのです。

「惑わされないように気を付けなさい。」イエスさまは、惑わなくてよい。偽りの安心を求めなくて良い。あなたの命は、わたしが贖い、わたしがあなたに、失われぬまことの平安を与えるから。そう言って下さいます。

「おびえてはならない。」恐れ、怯え、不安が満ちているこの世界で、見えるものによって絶望してはならない。わたしを見つめなさい。わたしがあなたと共にいて、わたしがあなたに救いを与え、わたしが必ず終わりの日にそれを完成させるから。そう言って下さいます。

イエスさまは、ご自分の十字架と復活のゆえに、わたしたちに、「救いの完成である終わりの日を、いつも目を覚まして、待ち望んでいなさい」。「わたしの後に従って、歩むべき道を、迷わずにひたすら歩みなさい」。そう、教えて下さるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、見えるものに心を寄せ、見えるものに安心し、見えるものを恐れ、見えるものに惑わされます。しかし、世の見えるものは、必ず失われ、終わっていきます。

どうかわたしたちが、見えないけれども、唯一確かで真実な、神さまの恵みのご支配をこそ、見つめることが出来るようにして下さい。

すぐに惑わされ、おびえてしまうような、わたしたちの罪の現実の只中にも、あらゆる悲惨の只中にも、神の御子イエスさまが共に立っていて下さり、十字架と復活の御業によって、わたしたちを救い出し、解放し、御国へと導いて下さることを信じます。

どうか、わたしたちが、虚しいもの、偽りのものに惑わされず、ひたすらイエスさまの御跡に従っていくことが出来るようにして下さい。

そして、救いの完成の日である終わりの日を、確かな希望として、いつも目を覚まして、心から待ち望むことが出来ますように。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン